

# 紀 要

## 第 1 号

---

---

### 目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
  2. 近江の地域色の再検討  
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—  
……………(小竹森直子)
  3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
  4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
  5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
  6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって  
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
  7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
  8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
  9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
  10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
- 
- 

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

### 3. 古式土師器研究ノート(1)

森 格 也

#### 1. はじめに

筆者は、1985年に守山市横江遺跡Ⅲ次、1986年に守山市石田三宅遺跡Ⅰ次、同横江遺跡Ⅳ次、1987年に同横江遺跡Ⅴ次、同石田三宅遺跡Ⅱ次の発掘調査<sup>(1)</sup>を担当する機会を得た。いずれの調査においても古式土師器<sup>(2)</sup>が相当数出土した。1987年以降、これらの調査の遺物整理と報告書刊行を順次行ってゆくことになった。加えて守山市笠原南遺跡の整理も担当することになり、この遺跡でも古式土師器が相当数出土している。以上のように古式土師器を整理していく過程で生じた問題点や考えたことなどをまとめてゆくことにする。前述の遺跡の個々の遺物やその問題点は各報告書にゆずることになるし、具体的な土器の分析も今後の作業になる。

そこで本稿では、近江における古式土師器研究の現状と課題、問題点を中心に述べ、今後の整理報告に向けての前提としたい。また先述の遺跡はすべて現守山市内に位置し、旧野洲川流域であるので今後これらの土器を分析し、近隣遺跡相互の比較分析を行ってゆくことは、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての野洲川流域の地域史<sup>(3)</sup>を考える上でも重要な作業となるであろうし、さらには近江の中での野洲川流域地域（湖南地域東部）を、ひいては日本の中での近江を考えて行く上での基礎作業となるものと考えてるのである。

#### 2. 近江における古式土師器研究略史

古式土師器の研究は、畿内を中心に弥生時代から古墳時代への移行期における土器の研究の中で、弥生土器研究の延長線上で進められてきた。

畿内では、1958年の大阪府船橋遺跡の調査とその成果<sup>(4)</sup>により、古式土師器編年の大枠がつくられた。そして1965年に田中琢氏が、畿内弥生第Ⅴ様式土器と布留式土器との間をうめるものとして庄内式土器を提唱し、これを最古の土師器とした<sup>(5)</sup>。その後しばらく古式土師研究は停滞していたが、1970年代に入ると、木下正史・安達厚三両氏による飛鳥地域での古式土師器の編年案<sup>(6)</sup>が、また奈良県纏向遺跡の報告とその出土土器の編年的考察が発表された。さらに都出比呂志氏は、土器製作技法の検討から河内地方の第Ⅴ様式～布留式に至る編年の基礎をつくった<sup>(7)</sup>。近年になっては増加する資料をふまえて編年の細分化がなされ、庄内式が4期に、布留式は5期に細分されるまでに至っている<sup>(8)</sup>。

これに対して近江での研究はというと、弥生土器では佐原真氏の論考<sup>(10)</sup>が発表以来、長い間唯一絶対のものであった。古式土師器では先述したような畿内の研究成果や、伊勢湾・東海地方での編年研究<sup>(11)</sup>、北陸地方の土器編年<sup>(12)</sup>といった近隣の地方の土器との併行関係という形でしかとらえられていなく、近江独自の編年は確立されていなかった。これは一つには次に述べるように、

近江独自の土器と東海地方の土器との混同に問題があった。

ところが近年、中西常雄氏を中心にして、それまで在地の弥生時代から古墳時代にかけての、中でも甕を、伊勢湾・東海地方の「S字状口縁」甕の範疇でとらえていたのを批判し新たに「受口状口縁」土器を提唱し<sup>(13)</sup>、伊勢湾・東海地方の土器と近江の土器を明確に区別して以来、研究は前進を始めた。以後、中西氏による大津市北大津遺跡を中心にした編年的研究<sup>(14)</sup>や、庄内期を中心にした近江全体の中での地域色と土器型式の変化を論じたもの<sup>(15)</sup>、丸山竜平氏の弥生時代後期から古墳時代にかけての実年代と相対年代を求める中で当該期の土器分析を行った論考<sup>(16)</sup>、兼康保明氏の野洲町久野部遺跡出土資料と畿内との比較研究<sup>(17)</sup>、先述の守山市横江遺跡と同石田三宅遺跡の中間に位置する、同金ヶ森西遺跡出土の布留式土器についての大橋美和子氏の論考<sup>(18)</sup>、弥生時代後期後葉から古墳時代直前にかけての土器群を検討し他地域との併行関係と近江の中の地域性を分析した用田政晴氏の論考<sup>(19)</sup>が示されるに至ってきた。

### 3. 近江における古式土師器の実態—甕を中心に

古式土師器を扱った論考は、畿内を中心に近年活発化している。①どの土器群をもって布留式とするか。②甕を中心とした技術的検討。③胎土分析を駆使した土器の移動について。④地方における在地土器から布留式土器への移行、両者の関係の問題、などが主流となっている。

ここで①・④について考えてみたい。①に関して言えば、小型精製土器三種の定型化をもって布留式とする立場と、布留形甕の成立をもってする立場があるようだが、本稿では前者の立場で考える。「布留式」とは様式レベルの概念である以上、ある程度生活に根づいた土器祭祀に用いられたと考えられる小型精製土器群の出現、定型化を指標とした方がよいと考えるからである。ある形式の甕が型式変化のある段階で型式の枠を飛び出し布留形甕という形式へと転換した時を布留式の成立と考えるなら、地方において突然と入ってきた布留形甕の存在＝布留式とは言えないのではないか。

次に④に関してだが、近江には弥生時代以来、「受口状口縁」土器が在地の土器として見うけられる。この土器の地域色が弥生時代の特色の一つとしてあげられ、古墳時代になり畿内内部族連合が前方後円墳の波及とともに全国支配を広げるにつれて土器も斉一化に向い、完全に転換しないまでもかなりの影響を受ける。この土器の斉一化は、布留式への統一化である。つまり畿内内部族連合の土器が、その支配の波及とともに地方に広がったと思われる。政治レベルで言うと、畿内内部族連合の支配下に在地首長が入ったということである。しかし民衆レベルでは、その地方の首長が畿内勢力の傘下に入ったとしても必ずしも生活すべてが同化するわけではない。墓制研究から見た古墳時代の開始と、土器研究から見たものがなかなか期を一にしないのもこのためではないか。

少々話がそれたが、畿内においても弥生第Ⅴ様式土器から庄内式土器、さらには布留式土器へと変化するのに複雑な過程がみられる。布留式影響甕、布留式傾向甕、布留式影響庄内形甕、伝統的Ⅴ様式甕など甕を例にとっても多種の呼び方が見うけられることからもうなずける。土器がある地域内で変化してゆく際には、他地域の土器をすべて新しく用いない限り、必ず前段階の

特徴を残している。また他地域から新たな技術、たとえば胴部内面へら削り技法などを取り入れるにしろ、他の部分は伝統的なものを残していることが多い。このように考えると土器が転換してゆく際に、中間形態のものが生じるのは当然である。そして胴部内面をへら削りし器壁を薄くし底部を丸底化することが、特に煮沸用の甕などにとってその熱効率があがり有効であるとその地域の集団が判断したときに、新しい土器へ転換するのである。

近江の場合を考えてみよう。甕を例にとってみると、在地の土器の「受口状口縁」甕は弥生時代後期には、口縁部外面に①櫛状工具による列点文が施されることが多かったのが列点文が次第に口縁下部（受口状に立上る部分）だけのものが多くなり、②やがて列点文がへら描沈線に変化し、③無文化してゆく。口縁部の形態も、①しっかりと稜をもって立上がり端部は平端か丸く収める。あるいは内傾するかであったのが、②やがて端部をつまみ出し、受口状の立上り部もやや丸みを帯びようになる。端部のつまみ出しははっきりとしたものが多く、横かやや上向きにつまみ出す。③そして口縁の立上りも丸みを帯びなだらかなものになり、端部のつまみ出しも弱くなる。胴部外面は①櫛状工具による施文から②へら状工具による施文③へら状工具による荒い施文かハケ目調整のみ、あるいは両者の組合せになるが、いずれにせよ施文は簡略化、無文化へ向かう。胴部内面は、特に野洲川流域では一貫してナデ調整のものが主流である。底部は①しっかりした平底から、②上げ底ぎみの薄く弱い平底、そして③丸底となるものが多い。

以上、「受口状口縁」甕について大雑把な変遷を見たが、大局的には①→②→③の順で弥生第Ⅴ様式→庄内式→布留式に相当すると考える。当然先に述べたように①期のものは②期に残るであろうし、②期のものは③期にまで残る可能性はあるが、典型的なものではなく形をくずしながら消えてゆく。

次に「く」字口縁甕を考えてみると、②期以降に通常見られるようになる。それは例えば河内から搬入された庄内式甕であったり、在地で製作された庄内形甕であったりする。これらは体部外面は叩き目のあるもの、刷毛目と両方あるものがあるが、内面はほとんどがへら削りである。布留形甕は外面は刷毛目で内面はへら削りのものがほとんどである。在産庄内形甕は、河内産の叩き目が左下りで細かいのに対し、右下りもしくは水平のもので叩き目も粗い。2 cm当たり5条という粗さである。大和産のものに類似している。尚、石田三宅では胴部破片ではあるが、河内産庄内形甕が出土している。近江では、この在産庄内形甕は少なくとも畿内庄内形甕の成立以後のものであるし、布留形甕と共存する可能性は十分にある。畿内より一段階遅れて在産庄内形甕が成立したころ、畿内では布留形甕が成立し、急速に流入したと考えられるからである。

では在地の「受口状口縁」甕と「く」字口縁の畿内系甕との関係はどのようになっているのだろうか。中西常雄氏によると北大津遺跡などで庄内式併行期以降、「北部地域が南部地域の土器の変化の歩みの中に入って行くのみならず、畿内地方との関係も含めて南部の地域色の中に組み込まれていった<sup>(20)</sup>」とされる。そしてこの地域差が解消され近江全体として畿内の影響下に入っていきとされた。大勢としてはそうであろうが、2、3注意したい事がある。

まず、野洲川流域の諸遺跡で「く」字口縁甕と「受口状口縁」甕が共伴する場合、前者のものが畿内で一般である通り体部内面をへら削りするが、後者は内面ナデ調整が主流である。胎土は

両者在地のものであるにもかかわらず製作技法が異なるという事は、土器製作者が異なる集団の者であるということであろうか。土器は女性が製作するならこの場合畿内から近江へ女性が来たのか、それとも近江の女性が搬入された畿内の土器を見ながら口縁部の違いにより作り分けたかである。

また体部以下は完全に球形化し丸底であり体部内外の調整も布留式甕と全く同じであるのに、口縁部だけが「受口状」である甕の存在<sup>(21)</sup>をどう考えるのか。この甕は完全に布留式併行期のものであるが、「受口状口縁」であることから古墳時代になっても畿内色へと同化されず在地色を残しているものである。甕であり実際に煮沸に用いることから、熱効率の良い畿内の土器の長所のみを採用し、口縁部だけは、先祖ゆかりのものとし、あるいは対外的に「近江」を示したとも考えられる。

北陸地方では布留期に移行すると、それまでの在地の月影式土器群（特に特徴的な甕）は解体してしまうが、<sup>(22)</sup>近江の場合では布留期になっても伝統的在地土器は解体しないで、一定期間続くが、「受口」の形態は先述したように退化の方向に進んでいる。そしてこの「受口状口縁」が布留期のどの段階まで残るのかは未解決の問題である。

以上が甕を中心にした近江における古式土師器の概況である。

#### 4. 古式土師器土器群の理解

世の中で古墳が造営され始めたころの、近江の野洲川流域でのA村での話である。野洲川流域といえば後世に服部遺跡と呼ばれる大集落が華やいでいた。そんな中でのある年にA村では土器の製作が行われていた。熟練した女性を中心に各種の土器が作られていた。中には土器作りをするのが初めてという人やまだ経験の浅い人も含まれていた。A村で土器製作で中心的な役割を果たしているB子さんがいたが、この日B子さんの頭の中には、先日服部村に行った時に見た畿内から持って来られたという甕が脳裏に焼きついていて、先祖代々教えられて来た土器と違う。特に甕は口縁部がすっきりとしていて、体部は丸みがあり薄い。火にかけた具合がとても良く、早く湯が沸いたり米がたけたりする。A村で土器を作る時にはB子さんが基本的に全体の構成やデザインを決めていた。今回は是非、あの畿内の土器の要素を取り入れてみようと考えていた。

甕を作るのには、口縁部は基本的に近江地方に代々伝わり、自分たちも日ごろ使っている受口形にするのであるが、受口形も昔と違って少しなだらな気味につくるのが今の流行である。あまり受口形の細部にこだわりすぎたり、外面を飾ったりすることよりも、煮沸という機能面に注意が払われるようになってきた。受口形というのは形を整えるのが結構難しく、特に先端部の作業には注意が必要である。まだ土器作りの経験の浅い人は、先端をつまみ出しすぎたり、あるいはうまくつまみ出せなかったりで、細い所がうまく出来ない。いつも使う受口形の口縁をした甕は今回もかなり作ったが、いつものことながら口縁の細部が人によって、あるいは同じ人でも作る土器によって微妙に違ったりしてしまうのである。

B子さんは、畿内の土器をまねてみようとした。内面は自分たちの土器と異なり板状の工具で器壁を薄くするのだ。底も丸い方が良く分かっているが、丸くするのがなかなか難しく、内側

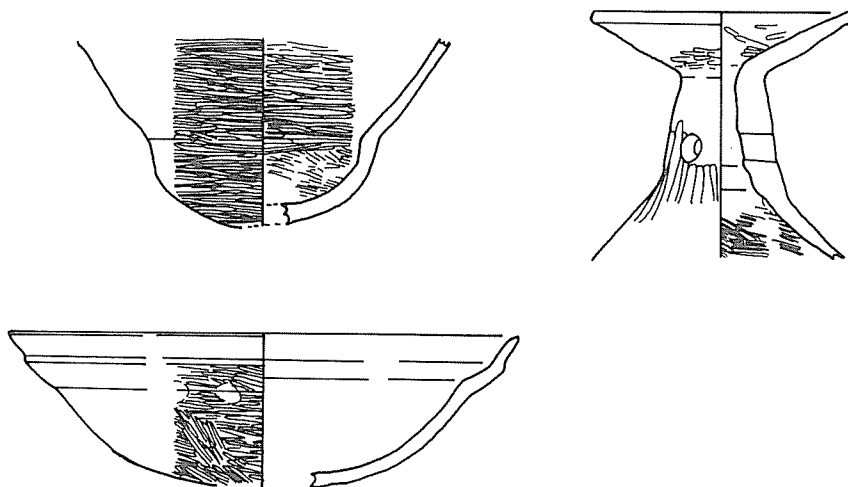
に指の痕が残ってしまったが、一応の完成を見た。しかし出来てみるとなかなかのもので、作るのにも底を作るときのコツを覚えたらすぐ出来る気がした。今回は試作なので少量しか作らなかったが、次回以降は量を増していこうと考えた。

昔と違って農耕が安定し、少しずつではあるがA村にも、貯えが出来てきた。そのための共同の倉庫も作られたので以前ほど壺はいらなくなったが、それでも各家にそれなりの量は必要である。近江は器台というものがあまり普及しなかったので、壺の底が丸底に向かって行くのもあまり具合がよくない。壺が立たなければ意味がないからだ。そこで平底の壺もまだ作ることにしているのである。また物をのせたりする高杯もいる。これは置いた時に目に映る箇所はきれいに磨いたりして丁寧に作っている。

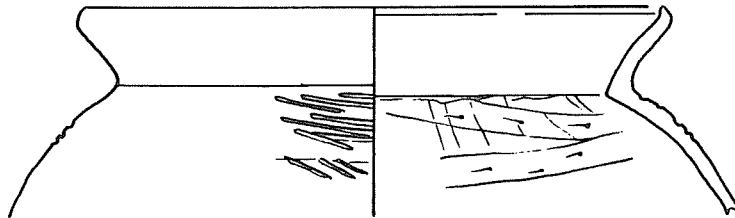
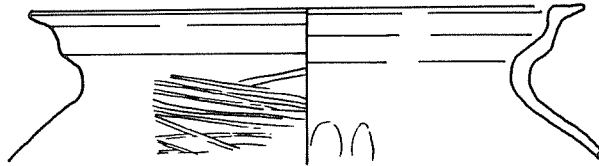
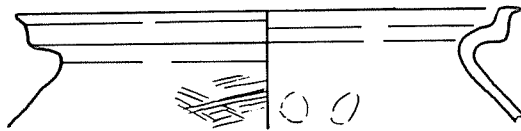
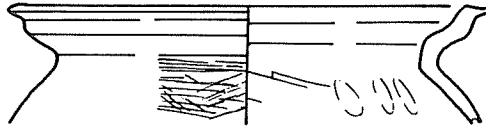
そろそろA村の祭りが近づいてきた。大和の大王が日本中にらみをきかすようになったころ、世の中には祭り専用のコンパクトにまとまった土器三点セットが広がった。これは祭り用というだけあって丁寧に作ったのである。また装飾を施した壺も作ったこともある。そして祭りも終わると土器の残骸は川に棄たり、穴に埋めてしまうのである。

A村を治める長や、近隣全体をまとめる首長が死んだ時には、葬儀用の土器が必要となる。装飾を入念に施した壺、日常生活にはあまり使用しない口縁部が二段に立上った大型の壺、器表に丹をぬった土器などを作ったのである。

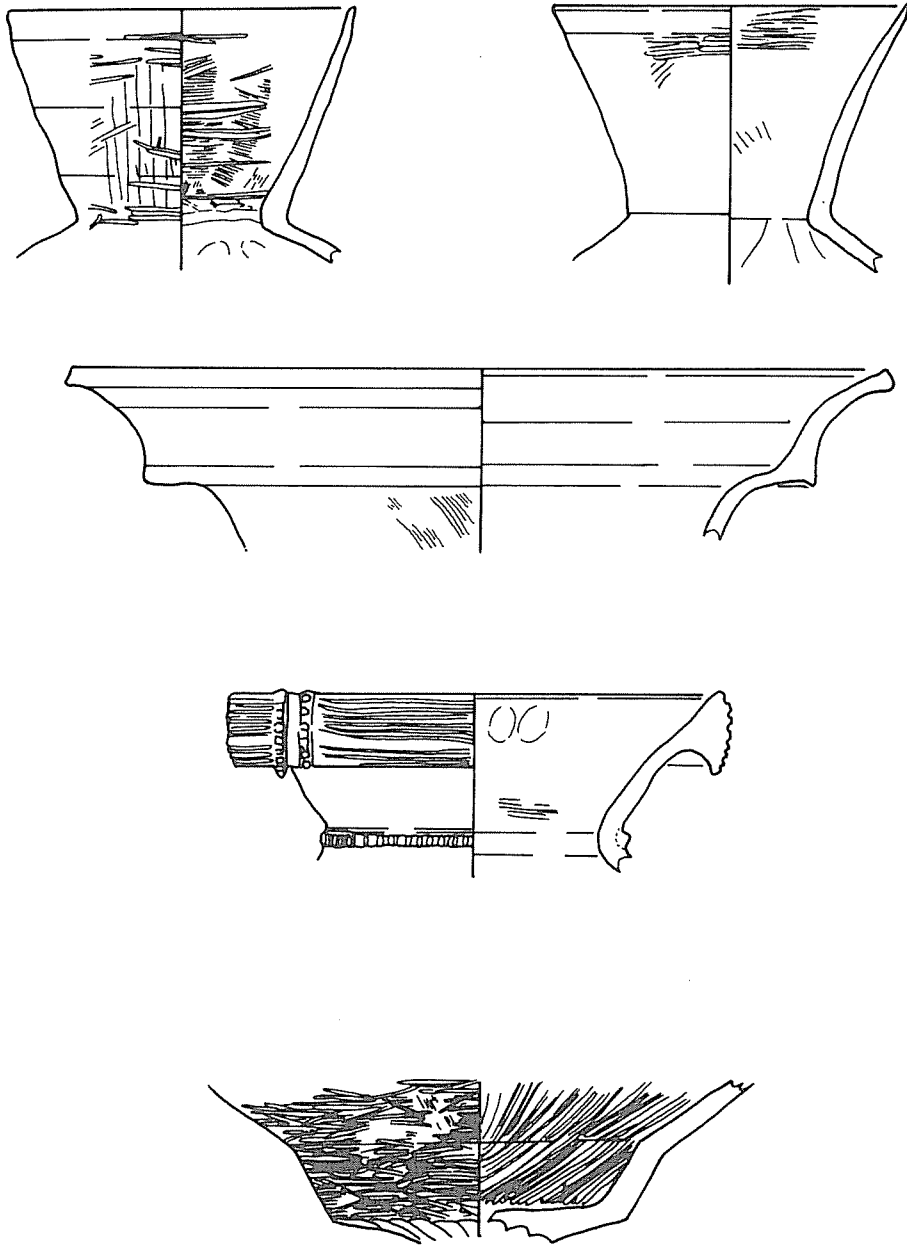
以上のようにA村では、必要に応じて多種多様な土器を作っている。土器の製作場には各種の



石田三守遺跡 第I調査区 SR-I III層 S=1/2



石田三宅遺跡 第I調査区 SR-I III層 S=1/2



石田三宅遺跡 第I調査区 SR-1 III層 S=1/2



工具がそろっていて、器種により工具を使い分け技法を変えていた。

それから1700年の後に、現代人の開発により目を覚ましたA村の人々の残した土器に遭遇した考古学徒はいろいろと思いをはせ、分析をこころみ当時を復元しようとするのである。あるいは近郊の村も含めて一定期間に製作した各種土器群を、今我々は「様式」という概念で呼び表している。たとえば「布留式」と通常我々が言うところの「式」は「様式」の意味である。旧石器文化のインダストリー・カルチャーに相当する。

古墳造営の開始期に人々の交流が活発になり、土器も移動し遺跡によっては複雑な土器相を示すことになる。特に社会の変動期では全体が揺れ動いており、社会を構成する人々の日常を反映する土器にも影響を及ぼすであろう。特に地方では、畿内文化の受容を通しての在地文化の変革があった。その各段階を反映している土器群があるはずである。畿内の庄内式土器と布留式成立期の土器と在地の土器が同時に出土することがある。これを2時期の混入と即断することは危険である。この混沌とした状態を一つの時期とすることも可能である。あるいは地方での畿内系の庄内式土器が出土したときには、即庄内期と判断するには危険を伴う場合もある。特に型式変化の遅いとされる壺の場合は注意である。平底でも布留期まで残ることが考えられるからだ。古墳の出現を考える上でも大きな課題となろう。

## 5. おわりに

筆者が本稿で古式土師器をテーマにしたのは、担当した遺跡で古式土師器が多く出土し整理をはじめたのがきっかけである。次の作業として、筆者がイメージした当時の様子の中に、個々具体的な土器をあてはめてゆくことである。これには土器群の一括性や層位的関係、出土状況が加味されることになる。やはり考古学の基礎はしっかりとした発掘調査であることを再認識した次第である。

注

- (1) いずれも滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会が調査を行った。
- (2) 本稿で言う古式土師器とは庄内式以後、須恵器出現までの土器群を示す。本稿が中心におくのは中でも布留式成立前後の土器群である。
- (3) 谷口徹「II. 地理的・歴史的環境」(『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980年)に守山市域を中心として詳しく紹介されている。
- (4) 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真『船橋II』(平安学園考古学クラブ 1962年)
- (5) 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』第12巻第2号 1965年)
- (6) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60号第2巻 1974年)
- (7) 石野博信・関川尚功『纏向』(奈良県立橿原考古学研究所編 1976年)
- (8) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号 1974年)
- (9) 寺沢薫「幾内古式土師器の編年と二、三の問題」(『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年)
- (10) 佐原真「琵琶湖地方」(『弥生式土器集成』本編2 1968年)、佐原真「先史時代」(『彦根市史』第2編上代 1960年)
- (11) 大参義一「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」(『名古屋大学文学部研究論集』XLVII史学16 1968年)
- (12) 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』 1983年)に学史についてまとめてある。谷内尾氏の編年案も参考になる。
- (13) 中西常雄・丸山竜平「第II章草津市片岡遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書III-2』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1975年)
- (14) 中西常雄『北大津の変貌』(1979年)
- (15) 中西常雄「近江における甕形土器の動向—庄内期を中心として—」(『考古学研究』第32巻第1号 1985年)
- (16) 丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ—近江における最古の土師器を求めて」(『古代研究』12 1977年)
- (17) 兼康保明「第v章 要説」(『久野部遺跡発掘調査報告書』野洲町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1977年)
- (18) 大橋美和子「vi-1 金ヶ森西遺跡出土の布留式土器について」((3)文献に同じ)
- (19) 用田政晴「近江における弥生時代後期後葉の土器群—その再検討—」(『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書II-3-長浜市大辰己遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985年)
- (20) (15)に同じ
- (21) 守山市笠原南遺跡第5トレンチSE-3より出土している。
- (22) 田嶋明人「IV考察-漆町遺跡出土土器の編年的考察—」(『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター 1986年)

## 編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほか、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年でありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版  
平成4年3月 2刷  
平成6年3月 3刷

### 紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781  
印 刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
Tel(0775)33-1241